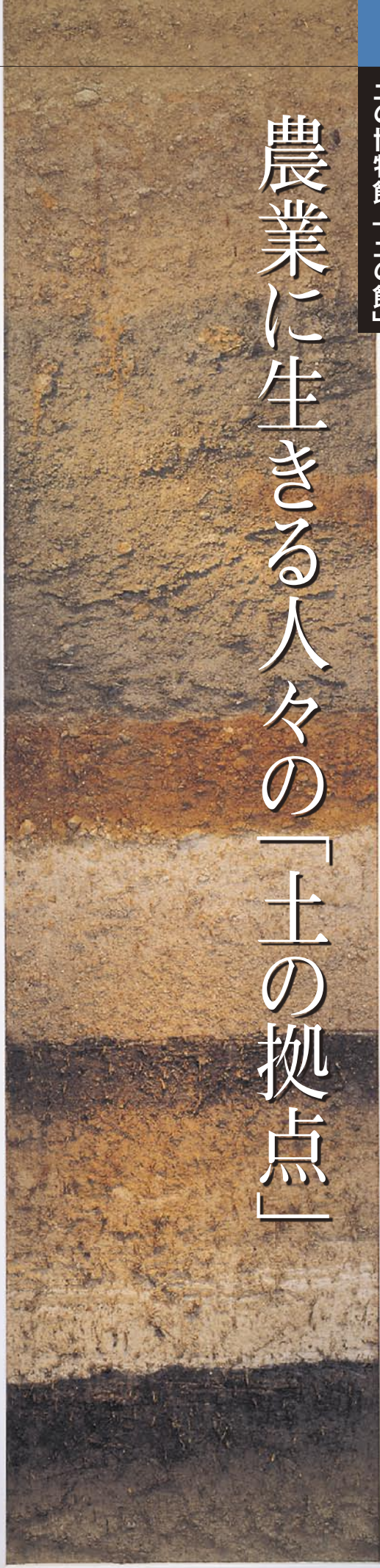


# 農業に生きる人々の「土の拠点」

- 1
- 2
- 3
- 4
- 5
- 6
- 7
- 8
- 9
- 10
- 11



泥流地帯の土層  
113252 札幌市緑区緑町1丁目1番地

上富良野町西2線北25号の丘陵地帯に本社を置

くスガノ農機が、農業博物館「土の館」を開館したのは1992（平成4）年7月である。以後、施設を増設するかたわら、見学研修コースを設けるなど工夫をこらしたので、団体客は急激に増え、入館者数は20万人を超えた。

土の館を建設した同社3代目社長の菅野祥孝さんは、

「農業は人間の努力が1割、あとは自然の力です。ときには優しく、ときには厳しい自然と向き合う農業こそ、『無尽の工場』であることを忘れてはならないのです」

と語る。

土の博物館は大きく三つにわかれている。このうちの1棟が「土の館」で、正面には未開の地の標本が掲げられている。第1展示場には北海道の開拓期に、過酷な条件の中で開墾に立ち向かった人々の農機具類と、初代社長菅野豊治の農機具への取り組みが刻まれている。

第2展示場は土がメインで、土のでき始めから世界の農耕の歴史を探求できるコーナーでは、北海道開拓初期に使われた和犁（スキ）や西洋農機具の土を耕す畜力プラウなどの世界の古代洋犁類が並んでおり、次のコーナーには土と環境に関する

資料が並んでいる。小麦の30年間連作に成功した大規模農場から、小さな野菜農家まで、全国50カ所の土壌を採取し、展示した土づくりコーナーは国内唯一のものという。

圧巻は第1と第2をつなぐ階段の壁に取り付けられた縦4mの巨大な土の標本展示だ。もつとも下層は1万年前ごろの沼地に土砂が堆積した層。ほぼ中間あたりには1897（明治30）年に三重県から入植開墾したころの土層が見える。その上に位置するのが1926（大正15）年に起こった十勝岳噴火による泥流大災害2mの痕跡だ。鉍毒を含んだ土は作物どころか草も生えず、何とか土